

「データ+声がかけて不登校をゼロに」

八王子市立恩方中学校



「Q-U 分析結果に基づいた有効な声掛け」

不登校を「減らす」より「起こりにくい」校内体質をつくる

恩方中学校では、「データ分析」と「声かけ」という2つの側面から、不登校が起こりにくい校内体質をつくる。Q-U を年2回実施し、データの分析を、専門家の指導の基に行い、各生徒の分布やその特徴を理解する。その上で、ポジティブ行動支援(PBS)などの、思春期の子どもへの働きかけや声掛けを教員と保護者が知り、実践することで、生徒の孤独感・不安感を取り除く。また校内別室などの環境も整備し、教室に入りづらい生徒・不登校の生徒の「居場所づくり」にも力を入れることで、不登校が起こりにくい校内体質をつくり、不登校ゼロをめざす。



八王子市立恩方中学校

1947年に創立。自然豊かな山間に位置している。生徒数は194人。北海道苫小牧市勇払中学校と姉妹校交流があり、令和7年度からは北海道へ修学旅行に行くようになった。

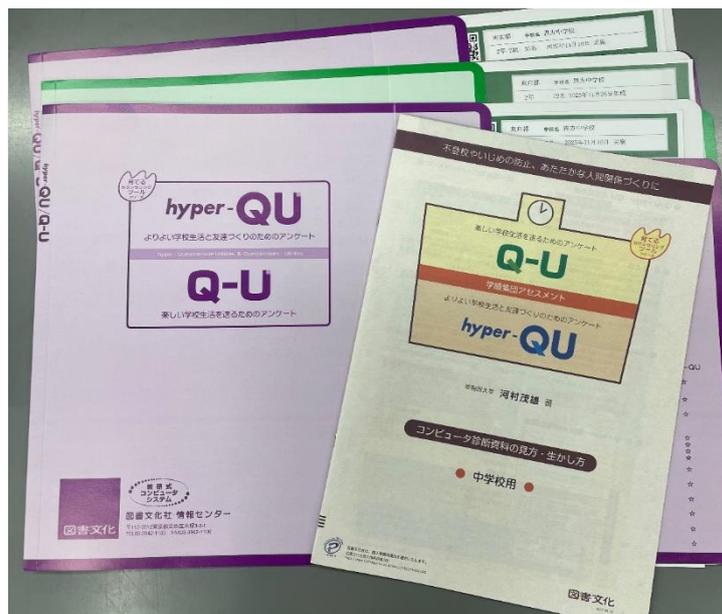
学校のホームページ

<https://hachioji-school.ed.jp/ongtj>

研究主題を実現するための取組

■ Q-U の実施・分析

Q-U を年2回実施し、各回実施後に講師を招いて校内研修を行い、各クラスの Q-U の結果から最大限の情報を読み取り、今後のクラス運営のための方策を探る。



■ ポジティブ行動支援の実施

生徒の行動を支援していく方法として、「ポジティブ行動支援 (PBS)」を取り入れることで、不登校になりにくい学校づくりをめざす。また、専門家を講師として校内研修会を行うことで、自分たちで取組を評価する。

■ 校内の居場所づくり

不登校生徒のための校内別室「恩方チャレンジ教室」の環境をさらに充実させ、設置する教材も工夫していく。また支援員に向けて、不登校生徒と対話するためのさまざまな方法を学ぶ研修会を実施していく。



研究成果と課題

研究テーマは「データ分析」と「声掛け」。
1年かけてこの2つに注目し、実現するための取組を以下の3項目に絞った。

- ① Q-U
- ② ポジティブ行動支援(PBS)
- ③ 居場所づくり(不登校生徒別室)

それぞれの取組における研究結果と課題を検証する。



ポジティブ行動支援の実践例:2年生の『ポジティブキャンペーン』。
着席チャイムを達成することに、台紙の☆印にシールを貼っていく。

【① Q-U の研究成果・課題】

教員から、Q-Uは実施しただけで終わってしまい、そのデータを学級経営に活かしきれない、という声があり、研修を行うに至った。1回目の研修では、基本的なQ-Uの結果の見方を学んだ。2回目では、個々の結果・データのみに注目しがちなQ-Uを、どのように集団に還元していくかを提示して頂いた。3回目は学年の変わり目ということで、グループエンカウンターを紹介して頂いた。新年度クラス開きをする際には、過去のQ-Uのデータも参考にしながら、グループエンカウンターを用いてよりよい学級づくりをしていきたい。課題としては、まだすべての教員がQ-Uのデータを活用しきれないことである。研修の時だけ参照するのではなく、授業のない時間の、ちょっとした教員間の会話でもQ-Uを使って人間関係や授業の改善のヒントにしていきたい。

【② ポジティブ行動支援(PBS)の研究成果・課題】

Q-Uで把握した個々の生徒の特長やクラスの状況を踏まえ、有効な支援の方法である「ポジティブ行動支援(PBS)」の研修を行った。研修後、「思ったより簡単に実践できそうだ」と、多くの教員が関心を示したが、中でも積極的かつ継続的にPBSを取り入れていた第2学年では、以下のような報告があった。

「クラス全員が始業のチャイムの前に着席出来たらシール1枚。シールの数が増える毎にクラスレク・学年レク・席替えなどができる」として、PBSを始めた。「レクをしたい」「席替えをしたい」という気持ちから着席チャイムを守れるようになり、朝の遅刻も減った。教員の姿勢も『ポジティブ』になった。生徒が全員着席チャイムをできたかどうかの判断は、クラス担任・副担任や、教科担任が行う。生徒の熱心さに影響され、教員も今までより早めに教室に向かうようになり、それに伴い授業準備も早くなり、働き方改革につながった。

声かけの仕方も、従来のようにただ「頑張れ」「やればできる」と言うだけではなく、生徒が真剣になったことで、「ここまでできる」「これ以上は難しい」という「努力の境界線」が可視化された。担任の要求は理不尽なものではなく、生徒との信頼関係も従来より深まったと感じている。

課題はこの変化を他学年にいかに広げていくかである。進路指導や生徒指導で教員の手が回らず、PBSの実施までに至らないことがあった。クラスや学年の人間関係が円滑になる活動であることがわかったので、令和8年度は学級開きと同時に行うなどの改善をしていきたい。

【③ 居場所づくり(校内別室)の研究成果・課題】

不登校生徒のための校内別室『恩方チャレンジ教室』は、単に「憂鬱な気分を紛らわせる」のではなく、和やかな対話の雰囲気の中で、「自分の気持ちに気付く・向き合う」ための場所であろうと心がけた。声かけは「動機づけ面接」のメソッドを応用し、生徒との会話の中に意識的に盛り込んだ。動機づけ面接の基本である『OARS(オールズ:開かれた質問・是認・聞き返し・要約)』という考え方を使得って生徒と会話をすることで、教室復帰を強要することなく、現状を見つめ、自身を振り返ることができたと思っている。課題は、校内別室での学習内容を体系化できなかったことである。

【全体の成果・課題】

令和8年1月現在で、本校の不登校出現率は7.73%。都平均の7.80%をわずかだが下回ることができている。日々山積する校務をこなしながら、教員は常に明るく、生徒に寄り添っていた。またそのような多忙な日々の中、研修においても「何か良いことを学び取ろう」という気持ちで参加していた。この教員の姿勢があつてこそその研究成果であると思っている。課題を挙げるとすれば、3つの取組が学校・教員全体に浸透するまでにはもう少し時間が必要であったことである。しかし、強制的になったり、「新しいことを取り入れないのはダメだ」という空気が広まってしまふのは良くない。恩方中学校の財産である、先生方のポジティブな雰囲気の中で、各自が影響を与え合うことで広まっていけばよいと思う。